

ドが認められた。2回目、3回目のエピソードである抑うつ状態と幻覚妄想状態については明確な心因は見あたらないが、初めのエピソードである幻覚妄想状態は、転居後に隣人との関係がうまくいかなかったことが誘因として考えられ、患者が神経質な性格であったことから、心因性の妄想反応であった可能性がある。また、遺伝要因は認められないが内因性の精神病である可能性も否定できない。しかし Castleman 病の好発年齢は平均して30歳とされており、本例でも明らかな身体症状や精神症状の発現以前に Castleman 病が既に発病している、これが精神病状態に関与していた可能性が考えられる。特に脳幹病変についてはこれまでもかなり精神症状に関する報告があり、本例の挿間性の精神病状態が直接的に脳幹病変と関連している可能性がある。

Castleman 病が症状精神病を起こす可能性については、Interleukin-6 (IL-6) による可能性を考察した。IL-6 が精神障害を引き起こす明確な証拠は無いが、発熱作用、神経成長因子様作用が確かめられており、多発性硬化症の発病に関係しているという報告がある。また IL-6 と同じサイトカインであるインターフェロンγ、慢性肝炎などの治療薬として投与した際に、中枢神経障害として情動・意欲に関する精神症状を起こすという報告もある。Castleman 病において増加している IL-6 が高粘度症候群をひき起こすとともに、このように症状精神病をもたらす可能性もあるので今後の症例の集積を待って検討していく必要があると考えられる。

#### 8) 神経性過食症の治療中に躁状態を呈した1症例

田中 敏恒・小林 徹 (新潟大学精神科)  
 中山 温信 (国立療養所 犀潟病院)

はじめに：今回我々は神経性過食症の治療中に躁状態を呈した1例を経験した。本日はその臨床経過を呈示すると共に感情障害に近縁な神経性過食症が存在する可能性について若干の考察を加え報告する。

症例：昭和39年生まれ27歳の女性。現病歴；昭和60年12月(21才)、短大2年生の時、過食、自己誘発性嘔吐、下剤の乱用などが現れほとんど毎日続いていた。そのため平成2年N大学精神科を受診し、神経性過食症と診断され、抗うつ剤による治療が開始された。その後約2週間で過食症は軽快した。しかしその8カ月後には躁状態を呈し精神病院に入院した。lithium carbonate などによる治療により2カ月後に寛解し退院した。しかし退院

後は lithium carbonate は中止されていた。退院直後より過食症は再発し退院後1カ月目から lithium carbonate を再投与し経過をみている。

考察：以上の臨床経過から、摂食障害と気分障害の関係について考察を試みたい。

Pope と Hudson は摂食障害と気分障害の近縁性について次のように総括している。まず気分障害が摂食障害の患者に認められたという報告はかなり多く存在する。摂食障害の症状のため2次的に抑うつ状態を呈したと考えられる症例も見られるが、中には大うつ病が摂食障害に前駆していた症例についての報告も見られる。一方躁状態を呈した症例についての報告も僅かながら報告されている。次に神経性食思不振症の患者は追跡の段階で、食行動の異常がおさまっている時でも抑うつ症状を呈することがあるという報告も見られる。第三に摂食障害患者の家族に感情障害を持つものが多いことが見いだされている。第4に神経性大食症の患者に dexamethasone 抑制試験と thyrotropine releasing hormone 刺激試験を施行すると大うつ病とほぼ同じくらい陽性反応を示すという報告がある。第5に摂食障害患者のうち特に神経性大食症の患者には抗うつ剤が著効するという報告が存在する。以上の5つの根拠から感情障害と摂食障害は近縁関係にある可能性が高いと Pope らは結論している。

本症例は抗うつ剤の投与により約5年間続いた過食症が軽快した。しかし抗うつ剤開始8カ月後には躁状態を呈した。このように神経性大食症の躁転例はそれ程多くは報告されておらず、更にその臨床経過を詳細に記述した報告は見あたらない。本症例は摂食障害と感情障害が近縁関係にあるという Pope らの報告を支持する貴重な症例と考えられたのでここに報告した。今後症例を積み重ね感情障害に近縁な摂食障害の臨床特徴を明らかにして行きたい。

#### 9) 県内薬物血中濃度コントロールサーベイの現状報告と考察

山口 勇司・三宅 章  
 齊藤 健利・田宮 崇 (田宮病院)  
 橋本 博・梶 鎮夫 (国立療養所 寺泊病院)  
 小野 博昭 (新潟こばり病院)

近年、血中薬物の正確・簡便・迅速な微量分析法が開発され、薬物療法の適正化・個別化を目指した薬物血中濃度モニタリング (TDM) が臨床の場において普及し